

築地の記念碑設置場所



- ① 海軍発祥の石碑「旗山」
- ② 海軍兵学寮址
- ③ 水路記念碑「日本国海図及び海洋調査発祥の地」

《参考文献》

- ・海上保安庁水路部編集 (1971) 日本水路史1871~1971 HYDROGRAPHY IN JAPAN, 一般財団法人 日本水路協会発行
- ・辰野忠夫 (1994) 季刊水路90号「東アジア諸国の測地系と日本測地系の歴史(2)」, 一般財団法人 日本水路協会発行

「植樹記念碑」碑文翻訳者

作家 倉阪 鬼一郎 (くらさか きいちろう)

1960年三重県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。短篇集『地底の鱷、天上の蛇』でデビュー。印刷会社勤務を経て、98年より専業作家。幻想小説、ホラー、ミステリ、時代小説を中心に活躍。『呪文学』『文字禍の館』『汝らその総ての悪を』『ダークネス』『うしろ』『不可能楽園<蒼色館>』『美術調律者・影(えい)』シリーズなど著作多数。主な時代小説に「小料理のどか屋 人情帖」「人情処 深川やぶ浪」「若さま包丁人情駒」シリーズなどがある。

水路記念碑設立準備会 2015年12月作成

海洋情報部 ゆかりの記念碑



海上保安庁海洋情報部



海軍兵学寮跡

海洋情報部は、明治4(1871)年9月12日〔旧暦7月28日〕兵部省海軍部水路局として、現在の東京都中央区築地に創設されました。創設時の庁舎は、海軍兵学寮(「寮」とは、律令制で省に付属する組織)の一室であったと記されています。

海軍兵学寮の場所は、現在の東京都中央区築地の国立がん研究センター中央病院の敷地にあたり、そこには海軍軍医学校跡の石碑と並び海軍兵学寮跡の石碑が設置されています。

数名で発足した水路局は、まもなく増員され事務室が手狭となったことから、12月〔旧暦11月〕には「築地ホテル」を買い上げて、翌5(1872)年2月〔旧暦1月〕中旬までに移転しました。

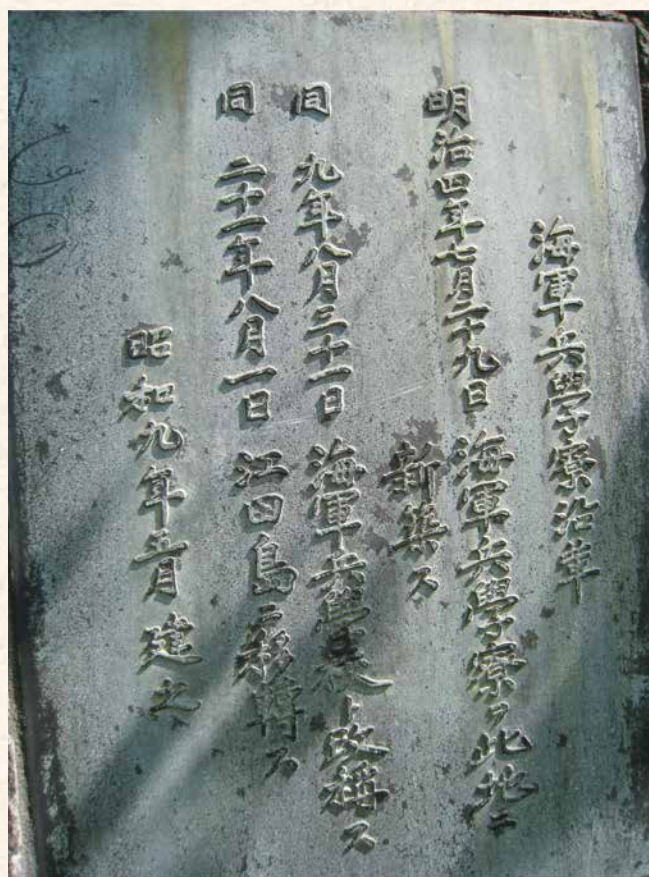


首都高速道路沿いにある海軍兵学寮跡と海軍軍医学校跡の石碑

石碑は、裏書「明治4年7月29日海軍兵学寮ヲ此地ニ新築ス」にあるとおり、水路局発足の場所を示すものです。



海軍兵学寮跡の石碑



海軍兵学寮跡の石碑の裏書

海軍発祥の石碑「旗山」

東京都中央区築地の東京中央卸売市場内にある「魚河岸水神社」境内には、「旗山」と書かれた石碑があります。この場所は、江戸時代、松平定信公の別荘であったところで、ここに海軍御旗が立てられたことから、旗山と呼ばれました。明治期は海軍用地となり、海軍省の標竿が立てられました。このことから、「旗山」は海軍発祥の

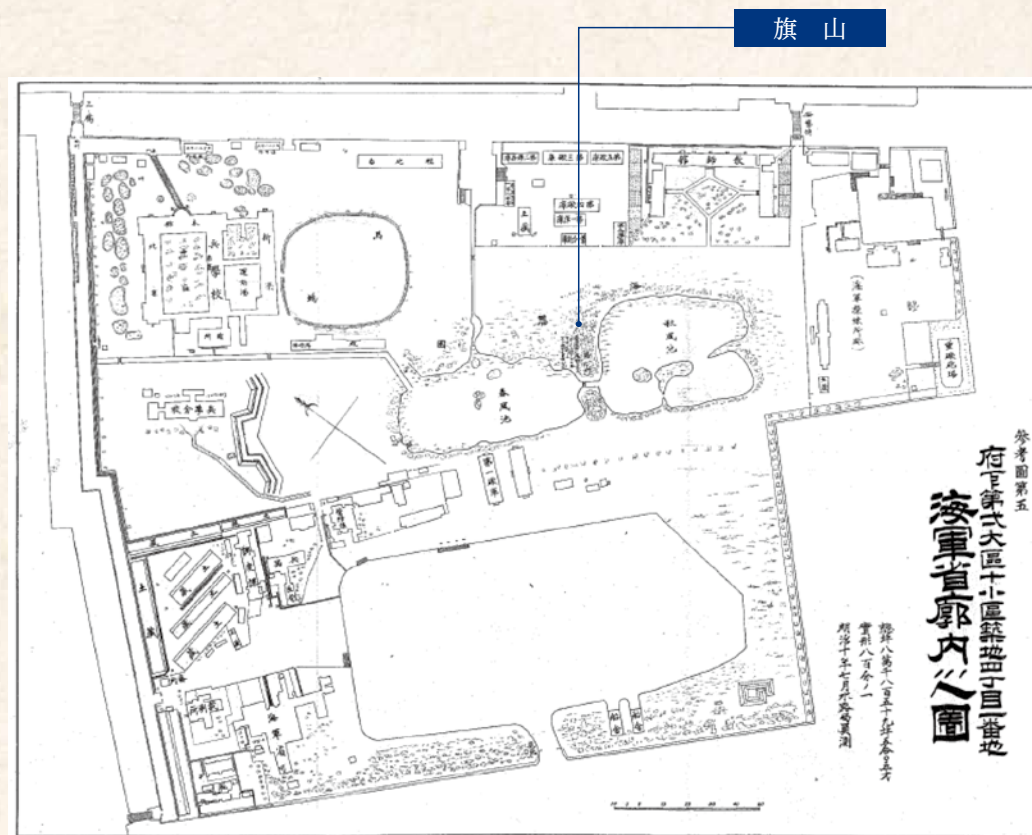
石碑といえます。

また、明治5(1872)年水路局長「柳植悦」^{ならよし}は、この標竿の経度の測定を行っています。旗山は、海軍観象台(後に移管され東京天文台)での経緯度測定以前に経度を測った場所であり、水路業務の歴史、測地学の歴史を物語るものとしても大切なものです。



魚河岸水神社と旗山の石碑

魚河岸水神社 由来



明治10年7月水路局員測 海軍省庁内之図

大正12 (1923) 年9月1日午前11時58分に発生した関東大震災により市中は火災となり、中央区築地にあった水路部の建築物にも引火、創業以来50年の長い年月にわたる貴重な資料や測量原図の大半、約2,500版に及ぶ海図原版をすべて焼失しました。

震災直後は、焼跡に建設された仮のバラック庁舎により業務を継続しました。東京市の復興計画として、築地に東京中央卸売市場が設置されることとなり、海軍関係機関の建物は、移転しなければならなくなりました。



昭和8年記念碑建碑当時の場所 (築地旧庁舎・矢印の方向から撮影)

しかし、水路部は築地5丁目に残ることが決まり、新設の千代橋と中央卸売市場の引込線 (信号機は今でも保存されている) との間、総坪数10,003坪の敷地に庁舎が建設されました。

昭和8 (1933) 年5月までに図誌倉庫・自動車庫その他の付属庁舎を除き建物が竣工したことから、



ら、構内に記念植樹が行われ、玄関正面に第19代水路部長海軍中将「小野彌一」の揮毫による「植樹記念碑」が建碑されました。

記念碑の裏に書かれた碑文には、東京の中心部にあった水路部の庁舎が震災により、あとかたもなく焼け落ち、そこから6年の歳月で再建したこと、その敷地には職員の寄付により植えられた樹木が生い茂ったことが記されており、震災からの復興が大きな課題であったことを知ることができます。

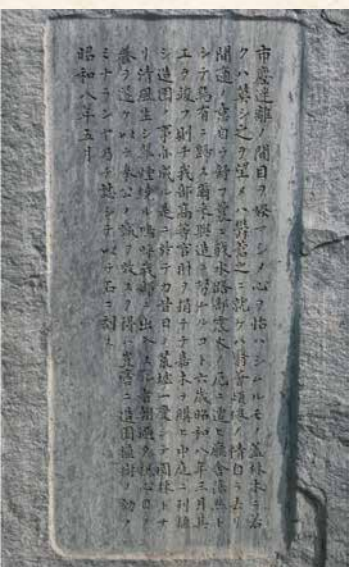
平成23 (2011) 年築地から江東区青海に海洋情報部の庁舎が移転した際、この記念碑も移設しました。



青海庁舎の駐輪場に設置



植樹記念碑表面



裏面の碑文

石碑の特徴

サイズ 高さ2m 横幅88cm 厚さ12cm
石材 東北地方を産地とする青御影石
石工 「青山 石勝刻」
東京の彫刻家 中村勝五郎、屋号「石勝」

植樹記念碑 裏面の碑文

「植樹記念碑」碑文 読み下し文、現代語訳作成 作家 倉阪鬼一郎氏

〔原文〕

市塵迷離ノ間目ヲ娛マシメ心ヲ怡ハシムルモノ蓋林木ニ若クハ莫シ之ヲ望メハ鬱蒼之二就ケハ翳會煩倦ノ情自ラ去リ間適ノ意自ラ舒フ曩ニ我水路部震火ノ厄ニ遭ヒ廳舎蕩然トシテ烏有二歸又爾來興造ニ努ムルコト六歳昭和八年三月其工ヲ竣フ則チ我部高等官財ヲ捐テ嘉木ヲ購ヒ中庭ニ列植シ造園ノ事亦成ル是ニ於テ力昔日ノ荒墟一変シテ園林トナリ清風生シ翠煙繞ル嗚呼我部二出入スル者朝過夕視心目ノ養ヲ遂ケ以テ奉公ノ誠ヲ效スヲ得ハ豈啻ニ造園植樹ノ効ノミナランヤ乃チ誌シテ以テ石ニ刻ス
昭和八年五月

〔読み下し文〕

*原文の言葉の切り方を変えてあります。
*読み下し文は、現代かなづかい(濁音あり)で書いています。
市塵迷離ノ間、めをたのしませ、心ヲ怡ハシムルモノ、蓋林木ニ若クハ莫シ之ヲ望メハ鬱蒼ノ間、目ヲ娛マシメ、心ヲ怡ハシムルモノ、けだしりんばくにくはなし、これをのぞめばうっそう、これにつけばえいわい、蓋林木ニ若クハナシ、之ヲ望メハ鬱蒼、之二就ケバ翳會、はんげんのじょうおのずからさり、かんできのいおのずからのぶ、煩倦ノ情自ラ去リ、間適ノ意自ラ舒フ、さきにわがすいろぶしんかのやくにあい、ちようしゃとうぜんとしてうゆうにきす、曩ニ我水路部震火ノ厄ニ遭ヒ、廳舎蕩然トシテ烏有二歸ス、爾來興造ニ努ムルコト六歳、昭和八年三月其工ヲ竣フ、すなわちわがぶこうとうかん、ぜいをすててかばくをあがない、則チ我部高等官、財ヲ捐テ嘉木ヲ購ヒ、なかになにれっしょくし、ぞうえんのことまたなる、中庭ニ列植シ、造園ノ事亦成ル、これにおいてか、せきじつのこうきよいっぺんしてえんりんとなり、是ニ於テ力、昔日ノ荒墟一変シテ園林トナリ、せいふうしようじすいせんめぐる、清風生シ翠煙繞ル、あわがぶにしゅつにゆうするもの、ちようかせきしんもくのようをとげ、嗚呼我部二出入スル者、朝過夕視心目ノ養ヲ遂ケ、もってほうこうのせいをいたすをえるは、以テ奉公ノ誠ヲ效スヲ得ハ、あにただにぞうえんしよくじゆのこうのみならんや、豈啻ニ造園植樹ノ効ノミナランヤ、すなわちしるして、もっていしにくくす、乃チ誌シテ、以テ石ニ刻ス、昭和八年五月

〔現代語訳〕

*言葉を適宜補い、わかりやすく意識しています。
ほこりっぱい街を行き交う人々の目を楽しませ、心をほっとさせるものといえば、やはり樹木に及ぶものはないでしょう。遠くから望めば鬱蒼としており、近づけば大高く生い茂っている樹木を見れば、倦み疲れた心は晴れ、おのずと安らかな気分が広がってきます。
先だって、わたしたち水路部は震災に遭い、庁舎はあとかたもなく焼け落ちてしまいました。それ以来、再建に努めること六年、昭和八年三月に新庁舎が竣工されました。そこで、わたしたち水路部の高等官は私財を投じ、良い木を購入して中庭に並んで植えました。造園が完成してみると、かつての荒れ果てた廢墟は一変して、すがすがしい風が吹き、緑が悦ばしくなびくようになりました。わたしたち水路部に入ります者たちは、朝夕の行き帰りにこの緑をながめて、目も心も新たにできるようになりました。
おかげで仕事がかいっばいできるようになったとすれば、これはひとえに造園と植樹の効果と言えましょう。その功績を記すべく、この記念碑に刻します。
昭和八年五月

初代水路部長柳摺悦胸像とライティングデスク



関東大震災により焼失した庁舎の代替として、昭和5（1930）年に水路部庁舎が竣工しました。

その記念として、初代水路部長「柳摺悦」の胸像が職員の寄付により製作されました。

昭和5（1930）年の胸像除幕式の写真には、摺悦の妻「勝子」夫人（柔道「講道館」の創設者「嘉納治五郎」の姉）、柳家当主「柳悦孝」氏ほか親族が写っています。

胸像の製作者は「東洋のロダン」と言われた「朝倉文夫」であり、美術品としての価値も有するものです。胸像の石膏原型は、朝倉彫塑館（台東区谷中）に保管されています。

胸像を備え置く木製の台座は、ライティングデスクになっています。デスクの正面には、柳部長の創

業方針「水路業務ノ一切ハ海員的精神ニ依リ徹頭徹尾外国人ヲ雇用セズ自力ヲ以テ外国ノ學術技芸ヲ選択利用シ改良進歩ヲ期スベシ」と記された銅版が掲げられています。ライティングデスクのデザインは、木製のレリーフがはめ込まれているなど和と洋が合い交えたものです。記録は見つかっていませんが、柳摺悦の三男で「用の美」を提唱した「民藝運動」の創始者、工芸美術の研究者である「宗悦（「そうえつ」ともいう）」がデザインしたものではないかと思われます。これは、宗悦が広島に昭和11（1936）年再建新築された海軍兵学校教育参考館の木製陳列台や日本民藝館（昭和11（1936）年宗悦が創設）で使用されている木製の陳列台をデザインしており、また宗悦が18世紀イギリス製のライティングデスクを所有していたことなどから考えられます。

胸像の製作は西洋美術の大家である「朝倉文夫」、台座のデスクのデザインが東洋美術の「柳宗悦」であれば、和洋融合の観点からもさらに貴重なものといえるでしょう。



胸像除幕式（昭和5年）



柳摺悦の胸像とライティングデスク



ライティングデスクと柳部長の創業方針



水路記念碑「日本国海図及び海洋調査発祥の地」

明治4（1871）年、ときの政府は、海運や国防のために船舶が安全に航海するため海の深さや目標物を記した海図の整備が急務であると考え、兵部省海軍部水路局を現在の東京都中央区築地に創設し、外国人に頼らず独力で海洋調査を行って日本国として初めての海図を作製しました。これらの業務は海上保安庁海洋情報部に引き継がれ、現在も続けられています。

平成23（2011）年、海洋情報部の庁舎を江東区青海に移転することとなり、140年に亘る長い歴史を刻んだ築地の地を発祥の地として後世に伝えることとしました。

平成27（2015）年4月、築地の海洋情報部庁舎の跡地には、東京国税局の庁舎が完成し、庁舎前広場に水路記念碑が設置されました。寄付により製作された記念碑には、発祥当時の海図の印章と、「日本国海図及び海洋調査発祥の地」との題字が刻まれ、その由縁が日本語と英語で記されています。また、記念碑と並んだ樹木

は、海洋情報部庁舎時代に中庭の殉職者慰霊碑付近にあった楠（クスノキ）が移植されたものです。

水路記念碑は、通りに面した広場に設置されており、いつでも自由に観ることができます。



水路記念碑と楠



水路記念碑